

東山118号窯発掘調査報告書

2020年

名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室

東山118号窯発掘調査報告書

2020年

名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市千種区園山町三丁目（名古屋大学構内）に所在する東山（略号H）118号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は、名古屋大学大学院文学研究科（当時）准教授梶原義実および同教授山本直人を調査担当とし、大学院実習「フィールド発掘調査実習」、学部実習「考古学実習」「考古博物館実習」の一環として実施した。
3. 2010年度調査は2010年9月16日から9月29日にかけて実施し、市川彰（名古屋大学文学研究科博士後期課程）、三岡山佳・水野蛭・大塚友恵・新谷葉菜・ツォグゾルマー・バドツェンゲル（同博士前期課程）、大西美那・藤井恵・腰地孝大・柴山賢太郎・波多野晶（名古屋大学文学部）、伊藤千夏（愛知淑徳大学）が参加した。2011年度調査は2011年8月30日から9月8日にかけて実施し、市川彰（名古屋大学文学研究科博士後期課程）、大塚友恵（同博士前期課程）、腰地孝大・柴山賢太郎・波多野晶・西尾佳小里・曾根翔太郎・田中哲史・真野智弘・福島鷹（名古屋大学文学部）が参加した。2012年度調査は2012年8月28日から9月6日にかけて実施し、新谷葉菜・小林新平（名古屋大学文学研究科博士前期課程）、波多野晶・田中哲史・真野智弘・福島鷹・石立峻介・岡田絃和・片桐妃奈子・高橋菜月・深谷岬・水島未紗（名古屋大学文学部）、井上隼多（愛知県立大学）が参加した。2013年度調査は2013年9月17日から9月30日にかけて実施し、小林新平・腰地孝大・村松裕南（名古屋大学文学研究科博士前期課程）、田中哲史・福島鷹・石立峻介・岡田絃和・片桐妃奈子・深谷岬・水島未紗・芝田早希・西本菜由・藤井美菜（名古屋大学文学部）、熊璋（名古屋大学短期交換留学受入れプログラム）、井上隼多・澤田香南子（愛知県立大学）が参加した。
4. 2013年度調査は、全学教育科目「基礎セミナーA」の一環として、名古屋大学1年生も参加した。
5. 出土遺物の整理および報告書の作成は、大学院実習「フィールド発掘調査実習」、学部実習「考古学実習」「考古博物館実習」の一環として、2010年2月から2019年3月にかけて、名古屋大学考古学研究室の大学院生・学部生により実施した。
6. 本調査は、京都国立博物館（当時）の尾野善裕氏に調査指導をお願いした。また既調査地北方斜面地の地下探査を、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の金田明大氏および西口和彦氏にお世話になり、2014年6月9日から6月12日にかけて実施した。2013年度調査における重機での表土掘削作業については、国際文化財株式会社の上田誠人氏にお世話になった。記して感謝の意を表す。
7. 発掘調査および整理作業については、下記の方々および機関にお世話になった（敬称略。ご所属は当時）。

伊藤伸幸（名古屋大学）・大西遼（愛知県陶磁美術館）・門脇誠二（名古屋大学）・高橋透（宮城県多賀城跡調査研究所）・永井邦仁（愛知県埋蔵文化財センター）・長崎千明（名古屋市教

- 育委員会)・中里信之(阿智村教育委員会)・中村俊夫(名古屋大学)・新美倫子(名古屋大学)・服部哲也(名古屋市教育委員会)・深谷淳(名古屋市教育委員会)・古尾谷知浩(名古屋大学)・北條献示(稲沢市教育委員会)・水橋公恵(三重県埋蔵文化財センター)・三好元樹(静岡県埋蔵文化財センター)・森泰通(豊田市教育委員会)・名古屋大学環境学研究科地理学研究室
8. 本書は梶原および専攻生が分担して執筆し、梶原が編集した。執筆分担については、目次と各文末に示した。
 9. 本報告書の刊行については、文部科学省科学研究費基盤研究(B)「古代における谷底平野および周辺丘陵部の開発と宗教施設の展開に関する研究」(代表:梶原義実)の一環としておこなった。また報告書刊行費用の一部は、名古屋大学全学同窓会大学支援事業「東山キャンパス内における古代窯業遺跡の周知公開」の助成を受け支出した。
 10. 調査記録および出土遺物は、名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室および名古屋大学博物館で保管している。

本文目次

第1章	遺跡の所在位置と環境	
	1. 地理的環境	(梶原義実) 1
	2. 歴史的環境	(梶原義実) 2
第2章	発掘調査に至る経緯	(梶原義実) 4
第3章	発掘調査の経過	
	1. 2010年度	(大西美那) 6
	2. 2011年度	(波多野晶) 7
	3. 2012年度	(真野智弘・福島 鷹) 8
	4. 2013年度	(村松裕南) 9
第4章	遺 構	
	1. 5トレンチ	(大塚友恵) 11
	2. 6トレンチ	(大塚友恵) 12
	3. 7トレンチ	(小林新平) 13
	4. 8トレンチ	(小林新平) 14
第5章	遺 物	
	5トレンチ出土遺物	(井上隼多) 16
	6トレンチ出土遺物	(井上隼多) 17
	7トレンチ出土遺物	(井上隼多) 20
	8トレンチ出土遺物 (包含層)	(井上隼多) 20
	8トレンチ出土遺物 (灰層)	(井上隼多) 22
第6章	考 察	
	1. 遺 構	(梶原義実) 31
	2. 遺 物	(田中哲史・梶原義実) 33

挿 図 目 次

第 1 図	調査地点位置図	1
第 2 図	調査地点周辺遺跡分布図	3
第 3 図	調査区設定図	5
第 4 図	5 トレンチ土層断面図	11
第 5 図	6 トレンチ土層断面図	12
第 6 図	7 トレンチ土層断面図	13
第 7 図	8 トレンチ平面図および土層断面図	15
第 8 図	5 トレンチ出土遺物実測図	16
第 9 図	6 トレンチ出土遺物実測図 (1)	18
第 10 図	6 トレンチ出土遺物実測図 (2)	19
第 11 図	7 トレンチ出土遺物実測図	21
第 12 図	8 トレンチ出土遺物実測図 (1)	22
第 13 図	8 トレンチ出土遺物実測図 (2)	23
第 14 図	8 トレンチ出土遺物実測図 (3)	24
第 15 図	8 トレンチ出土遺物実測図 (4)	26
第 16 図	8 トレンチ出土資料実測図 (5)	27
第 17 図	5~8 トレンチ土層断面図合成図	31
第 18 図	H-118・61・39 号窯灰層分布想定図	32
第 19 図	H-118・44・15・50 号窯杯類法量分布図	33
第 20 図	H-44 号窯出土遺物実測図	35
第 21 図	H-15 号窯出土遺物実測図	37
第 22 図	H-50 号窯出土遺物実測図	39
第 23 図	H-44・95・15 号窯杯蓋・杯身口径分布図	44

表 目 次

第1表	実測図掲載遺物一覧表	28
第2表	6~7世紀猿投窯編年表	41
第3表	H-44・118・15・50号窯器種構成表	42

写真図版目次

- 図版1 遺跡 1. 調査地全景
2. 5トレンチ灰層上面 (西より)
3. 5トレンチ完掘状況 (東より)
- 図版2 遺跡 4. 6トレンチ灰層上面 (西より)
5. 6トレンチ灰層堆積状況 (西より)
6. 6トレンチ測量風景
- 図版3 遺跡 7. 7トレンチ掘削中
8. 7トレンチ灰層上面 (東より)
9. 7トレンチ完掘状況 (西より)
- 図版4 遺跡 10. 8トレンチ灰層上面 (東より)
11. 8トレンチ北壁
- 図版5 遺跡 12. 2010年度集合写真
13. 2011年度集合写真
14. 2012年度集合写真
15. 2013年度集合写真
- 図版6 遺物 (1)
- 図版7 遺物 (2)

第1章 遺跡の所在位置と環境

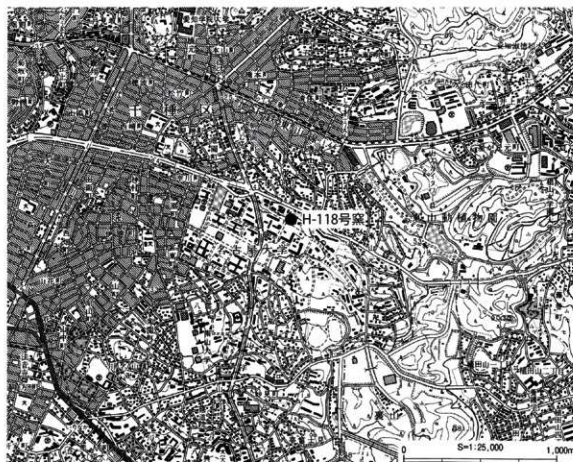
1. 地理的環境

H-118号窟は、愛知県名古屋市千種区圃山町名古屋大学構内に所在する(第1図)。本遺跡の所在する名古屋市東部丘陵は、名古屋市千種区・名東区から長久手市、日進市にわたって広がる標高約40m~100m程度の起伏に富んだ丘陵地帯であり、遺跡はこの丘陵の西端にあたる東山丘陵からさらに北西方向に張り出した尾根筋の南側斜面に位置している。遺跡から西へ1kmほど行くと東山丘陵の先端部に達し、そこから地形は西方に大きく傾斜し、濃尾平野を一望に見渡すことができる。

調査地の周辺には現在、名古屋大学の諸施設が立ち並んでいる。調査地周辺の地形は、1942年にはじまる名古屋大学の東山キャンパスへの移転に伴う大学施設の建設工事により著しく改変されており、それによって多くの窟跡が滅失したと考えられている。

遺跡周辺の現生植生は、コナラ・アベマキなどが混在する二次林が主である。

(梶原)



第1図 調査地点位置図(国土地理院1:25,000地形図「名古屋南部」を改変)

2. 歴史的環境

名古屋市東部丘陵は起伏の激しい丘陵地帯であり、弥生時代以前は、ほとんど遺跡の分布はみられない。

古墳時代中期から古代・中世前半にかけて、この地域には須恵器や灰軸陶器、山茶碗の窯跡およそ1000基が築かれた。猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）と呼ばれる一大窯業生産地である。猿投窯は東山（H）・岩崎（I）・鳴海（N）・折戸（O）・黒笹（K）・井ヶ谷（IG）・瀬戸の7地区に区分されており、今回調査をおこなったH-118号窯は、猿投窯東山地区に属する窯跡である。

東山地区は猿投窯でもっとも早く須恵器生産がはじまった地区とされ、5世紀中葉頃とされるH-111号窯以降、多くの窯が築かれている。なかでもH-48号窯・H-11号窯・H-10号窯、2003年11月から12月にかけて本研究室で発掘調査をおこなったH-61号窯（尾野・梶原ほか2010）、鯉ヶ池古窯・H-44号窯・H-15号窯・H-50号窯・H-16号窯などは、猿投窯における須恵器編年のうえでの標式窯となっている。

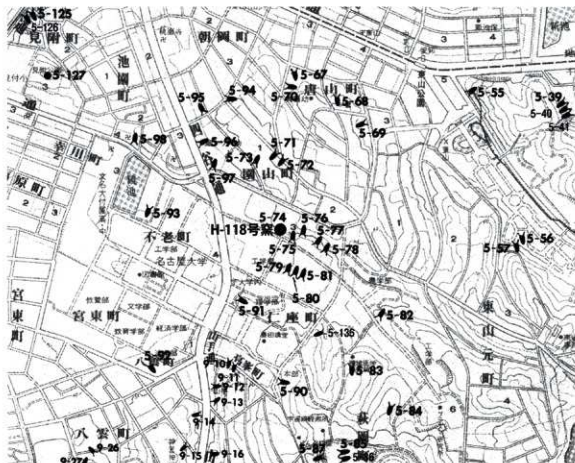
その後窯場は東山地区から、日進市を中心とした岩崎地区、名古屋市緑区を中心とした鳴海地区へと移動していき、また小牧市を中心とした尾北窯でも大規模な須恵器生産が開始され、東山地区では8世紀後半以降には、ほとんど窯が築造されなくなっていく。

しかし10世紀になると、東山地区の一部では、ふたたび灰軸陶器生産がおこなわれるようになる。2014年～2015年にかけて本研究室で発掘調査をおこなったH-72号窯（梶原・片桐ほか2017）はその代表例であり、10世紀後半の猿投窯における標式窯として設定されている。だが、この時期の東山地区での灰軸陶器生産はさほど盛んであったとはいえ、該期の窯業生産の中心は、あくまで瀬戸・東濃であった。

11世紀後半から12世紀頃になると、東山地区ではふたたび多くの窯が作られるようになる。とくに2003年1月に本研究室で発掘調査をおこなったH-114号窯の遺物は、その中でも比較的古相を呈しており、灰軸陶器から山茶碗への移行期の窯とされている（尾野ほか2006）。その後東山地区では、平安時代末～鎌倉時代前期を中心に100基以上の窯が築かれ、山茶碗ばかりでなく、瓦などの特殊品も焼成された。そのうち一部の瓦は、京都の鳥羽東殿や鎌倉方面へ運ばれたことが知られる。

名古屋大学の構内には、現在までに須恵器窯が本窯を含めて5基、灰軸陶器・山茶碗窯が16基確認されている（第2図）。調査地付近は、大学施設建設にあたって多くの窯が滅失したと思われるものの、大学構内東半を中心に、いまでも山林として原地形が残されている部分も多い。本窯もこれまでの分布調査では知られていなかった窯であり、またH-114号窯が谷筋の厚い流土の下からあらたに発見されたように、名古屋大学構内には未知の窯跡がまだ存在する可能性もあり、今後の調査研究が期待される。

（梶原）



遺跡番号	遺跡名称	時代	遺跡番号	遺跡名称	時代	遺跡番号	遺跡名称	時代
5-39	H-69号窯		5-78	H-G-35号窯	平安	5-97	H-13号窯	
5-40	H-70号窯		5-79	H-G-36号窯	平安	5-98	H-63号窯	奈良
5-41	H-71号窯		5-80	H-G-37号窯	平安	5-125	H-48号窯	古墳
5-55	H-G-59号窯	平安	5-81	H-G-38号窯	平安	5-126	H-49号窯	古墳
5-56	H-G-8号窯	平安	5-82	H-G-30号窯	平安	5-127	入船山古墳	古墳
5-57	H-G-3号窯	平安	5-83	H-G-23号窯	平安	5-136	H-114号窯	平安
5-67	H-47号窯	古墳	5-84	H-G-24号窯	平安	9-10	H-53号窯	平安
5-68	H-59号窯		5-85	H-G-31号窯	平安	9-11	H-G-54号窯	平安
5-69	H-45号窯		5-86	H-G-32号窯	平安	9-12	H-102号窯	平安
5-70	H-12号窯		5-87	H-G-33号窯	平安	9-13	H-1号窯	平安
5-71	H-8号窯		5-90	H-G-20号窯	平安	9-14	H-90号窯	平安
5-72	H-9号窯	平安	5-91	H-G-48号窯	平安	9-15	H-41号窯	平安
5-73	H-46号窯	古墳	5-92	H-35号窯	平安	9-16	H-40号窯	古墳
5-74	H-39号窯	古墳	5-93	H-66号窯	古墳	9-26	H-42号窯	奈良
5-75	H-61号窯	古墳	5-94	H-G-56号窯	鎌倉	9-27	H-91号窯	平安
5-76	H-G-28号窯	平安	5-95	H-57号窯				
5-77	H-72号窯	平安	5-96	H-58号窯				

第2図 調査地点周辺遺跡分布図

第2章 発掘調査に至る経緯

猿投窯の調査は、1955年より愛知県教育委員会の主催で、名古屋大学考古学研究室の橋崎彰一氏を中心に進められ、大きな成果をあげてきた。名古屋大学の構内にも約20基の窯が確認されており、そのうちH-61号窯が古墳時代の、H-72号窯が平安時代の標式窯として、橋崎氏や齋藤孝正氏らによって設定されている。

名古屋大学考古学研究室では、2003年1月、野依学術交流会館の新設工事に伴い発見された窯であるH-114号窯の緊急調査を、名古屋大学施設部の依頼により実施し、窯の煙道部および灰層を検出した（尾野編2006）。

また2003年11月から12月にかけて、名古屋大学構内の理系中華食堂および理系カフェテリア（当時）の改築工事に伴い、名古屋大学施設部の依頼をうけ、H-61号窯の範囲確認調査をおこない、H-61号窯の灰層および、その下層にH-39号窯由来のものと思われるより古い灰層を確認した（尾野・梶原編2010）。

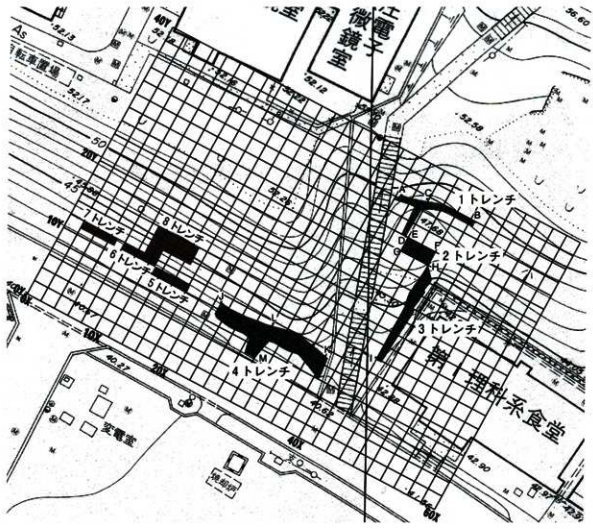
その後2010年度から、名古屋大学考古学研究室では、大学院生向け調査実習である「フィールド発掘調査実習」および学部向け実習授業である「考古学実習」「考古博物館実習」の一環として、名古屋大学構内における埋蔵文化財の実態把握を目的に、構内に残る窯業遺跡の学術発掘調査を継続しておこなってきた。

2010年度から2013年度にかけて、H-39号窯由来と思われる灰層の西への広がりを確認する目的で、2003年調査区の西側斜面に計4つのトレンチを設定し、発掘調査をおこなった（本報告書）。

2014年度および2015年度には、H-61号窯とおなじく標式窯に設定されたH-72号窯について、窯体構造を含めた遺構の状況および出土遺物の実態を把握することを目的に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の協力のもとで事前の地下探査をおこない、発掘調査を実施した（梶原・片桐編2017）。

2016年度には、H-39号窯の灰層の西端を確認するための発掘調査を実施した。

（梶原）



第3図 調査区設定図 (500分の1)

第3章 発掘調査の経過（発掘調査日誌抄）

1. 2010年度調査

9月16日(木)

調査区一帯の杭打ち。H-61号窟調査時のグリッドに合わせる形で杭を設定。6X12Y～30X8Yの範囲に、2mグリッドを組む。大学構内の基準点から現場周辺へのレベル移動。杭上にレベルを落とす。

9月17日(金)

杭打ち継続。調査前全景写真撮影。8X10Y～18X11Yの1m×10mの範囲で調査区を設定、表土掘削を開始。

9月20日(月)

掘り下げ部分を東半分(13X10Y～18X11Y)に変更し、表土掘削を継続(5トレンチ)。

9月21日(火)

表土掘削後、清掃し写真撮影。1m幅のトレンチの北半分について、さらに下層の褐色系の礫混土を掘り下げていく。この層からは山茶碗などが検出され、純粋な灰層はまだ下だと思われる。この礫混土はやや崩れやすく、後世の整地層と思われる。

9月22日(水)

さらに掘り下げ。礫の少ない安定した灰色～茶色土の土層が確認されたが、ここからも須恵器とともにまだ山茶碗が出土。中世の整地層か。トレンチ西端、13X11Y～14X11Y付近で、小礫混じりの黒色が強い土層を検出。この層は西側へ深く落ち込んでいるようである。

9月23日(木)

雨天で現場は中止。尾野善裕氏ら来訪、指導を受ける。

9月24日(金)

トレンチ幅が狭くなったので、南半分も含めて一気に掘り下げる。トレンチ西側の黒色土層の出土遺物は、須恵器のみで山茶碗を含んでおらず、灰層の端部である可能性。東半ではこの土層は存在せず、山茶碗が混じる茶色系土層の下からは、無遺物で硬質の地山層が検出された。

9月27日(月)

トレンチ西側は黒色土層上面、東側は地山上面で清掃し、写真撮影。その後黒色土層を地山まで掘り下げ、壁面清掃後、完掘写真の撮影。ちなみに灰層出土遺物はH-61およびその下層灰層(H-39?)出土遺物より新しい可能性。撮影後、地山の断ち割りをおこない、下層が無遺物であることを確認する。

9月28日(火)

トレンチ清掃、分層。北壁と西壁の土層断面図を作成。

9月29日(水)

土層断面図の完成。埋め戻し。撤収。

(大西)

2. 2011年度調査

8月30日(火)

2010年度に設定した5トレンチの西側に、1m北側に寄せ、8X11Y~13X12Yの1m×5mのトレンチを設定(6トレンチ)。掘り下げ開始。

8月31日(水)

表土および近代の整地土と思われる礫層(70cmほど)を掘り下げたところ、トレンチ全面にわたる比較的安定した暗灰色土を検出。この層には須恵器が少量混じっている。整地前の旧表土の可能性が高いが、灰層上面の可能性も考え、いちおう上面で清掃、写真撮影。

9月1日(木)

暗灰色土の掘り下げ。この土は意外と薄く、さらに下から山茶碗を含む茶褐色土が検出される。さらに40cmほど掘り進めると、遺物や窯壁等を多く含む、橙色がかった黒色土層が検出された。またトレンチ東端の12X~13X付近では、特に黒色の強い土層と多くの須恵器が確認された。これらの層が灰層上面と判断し、清掃して写真撮影。

9月2日(金)

黒色土層の掘り下げ。多くの須恵器および窯壁が出土するが、山茶碗など新しい時期の遺物は含まず。黒色土層はトレンチ東半で厚く、また遺物も多く、西半では徐々に薄く途切れ気味になる。2010年調査の5トレンチ西端で検出された灰層の続きと判断できる。その下からは地山である無遺物の白色系の礫層を検出。

午後は雨のため洗い作業。

9月5日(月)

トレンチ清掃。分層。

9月6日(火)

壁面清掃、完掘写真撮影、分層、土層断面図の作成（北壁・東壁・西壁）。

9月7日(水)

土層断面図の作成（北壁・東壁・南壁）。完掘プラン図作成。

9月8日(木)

尾野氏ら来訪。指導を受ける。その後埋め戻し。撤収。

(波多野)

3. 2012年度調査

8月28日(火)

2011年度に設定した6トレンチの東側に、樹木を避けつつ1m西側に寄せ、2X11Y~7X12Yの1m×5mのトレンチを設定（7トレンチ）。掘り下げ開始。

8月29日(水)

表土層および整地土の礫層の掘り下げ。

8月30日(木)

礫層の下に暗灰色系の硬質の土層を検出。レベル的に灰層とは思われず、整地層の一部だと思われるが、いちおう上面で清掃し、写真撮影。

8月31日(金)

暗灰色硬化土層の掘り下げ。この土層は薄く、下から茶色系の砂礫層を検出。無遺物であり、中世整地土の一部か地山か判断に迷う。ただしトレンチ東端のみは、黒色の濃い土層が続き、遺物も集中しており、東端の一部にのみ灰層が残る可能性。この上面で清掃し、検出写真を撮影。

9月3日(月)

西半の茶色系砂礫と東端の黒色灰層の関係がいまいち不分明であり、両者をさらに断ち割って上下関係を探索。尾野氏ら来訪、調査指導を受ける。

9月4日(火)

トレンチ西半を掘り下げたが、茶色系砂礫の下には明確な灰層は検出されず、茶系の粘質土から地山へと漸移していく。トレンチ東端の灰層も順次掘り下げ。

9月5日(水)

清掃、完掘写真撮影。分層し、土層断面図の作成。

9月6日(木)

埋め戻し。撤収。

(真野・福島)

4. 2013年度調査

9月17日(火)

機材の運搬。調査区の設定。本年度は5~6トレンチから斜面上方(北方)に広めのトレンチを設定し、窯体の検出を目指す。11X13Y~17X16Yの6m×3mおよび、南西端に6トレンチに接続する拡張区を設定する(8トレンチ)。杭打ちおよび基準点からのレベル移動。

重機による表土掘削。調査区北壁でとくに整地土層が厚く、法面を確保しつつ掘削。重機作業後はトレンチの壁立てと清掃作業。

9月18日(水)

平板による調査区平面プラン図の作成。整地土の礫層を除去すると、調査区西半で暗灰色土が検出され、上面のレベルを測定した。

9月19日(木)

暗灰色土層が調査区全面で検出。既往の調査から旧表土面と思われるが、上面で清掃し写真撮影。撮影後は暗灰色土を掘り下げ。掘り下げにあたっては、遺物を西側から4地区および、南西を拡張区として、計5地区に分けて取り上げ。

9月20日(金)

暗灰色土は薄く、その下には山茶碗を含む茶褐色土層。さらに掘り下げると、トレンチ北東部の一部で灰層と思われる黒色土を検出。それに対してトレンチ南方は、中世の茶褐色土、その下の黒色土層ともに南に大きく下がっている様子。

9月21日(土)

午前中のみ現場を開ける。尾野氏ら来訪、調査指導を受ける。

9月24日(火)

灰層上面を全体的に検出し、清掃、写真撮影。灰層上面のレベルおよび平板測量。

午後から灰層を人工層位で掘り下げ(1回目、2回目)。灰層は締まりが弱い土で、遺物は全面で多く出土。調査区東半には窯壁が集中。

9月25日(水)

さらに灰層を掘り下げ(3回目、4回目)。遺物は上層と下層で明確な年代差は見られないようである。調査区の各所で黄褐色系などの無遺物の地山が検出される。調査区北西端でみられる赤土っぽい土と地山の関係は要確認。

9月26日(木)

灰層掘り下げ(5回目)。地山上面で清掃をおこない、写真撮影。その後、地理学研究室による3Dカメラ地形測量の見学。午後からはトレンチ北壁、東壁の分層。

9月27日(金)

完掘写真の撮影。土層断面図の作成(北壁・東壁・西壁)。午後から埋め戻し開始。

9月28日(土)～29日(日)

埋め戻し。

9月30日(月)

撤収作業。

(村松)

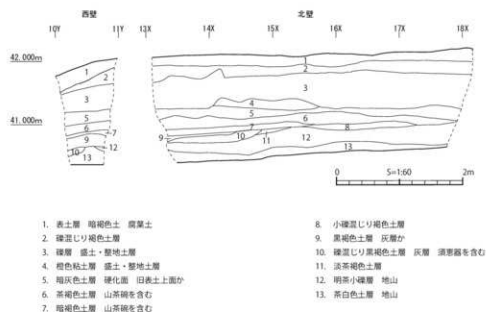
第4章 遺 構

1. 5トレンチ

5トレンチは、H-61号窟調査時の4トレンチ西端で検出されたH-39号窟由来と思われる灰層の広がりを確認するため、4トレンチの西側に並行した標高約42m付近に南北1m×東西5mの長方形の調査区を設定した。グリッドとしては13X～18X、10Y～11Yにあたる。

5トレンチにおいては、30～40cm程の表土層（1・2層）の下層に整地土層（3・4層）が確認された。整地土層を除くと、暗灰色土の層（5層）が調査区全面において検出され、硬くしまった状況から旧表土面と考えられ、その下の山茶碗を含む褐色系の層（6・7層）は旧整地土層とされる。この旧整地土層下から、トレンチ西端の13X～15Xあたりのレベル40.8m付近において灰層とみられる黒褐色系の層（9・10層）が検出された。9層は褐色気味で遺物も多くないが、10層からは杯類を中心とした須恵器が多く出土した。この灰層はトレンチ西端で厚く20cm程度堆積するが、15X～16X付近で漸移的に消滅することから、灰層の中心は西側へ広がっていることが想定され、4トレンチ西端で検出しされた灰層とは連続しないとみられる。最下層で無遺物の地山（12・13層）を検出した。地山面が南西方向に低くなっていることから、旧地形は南西に傾斜があった可能性も考えられる。

(大塚)



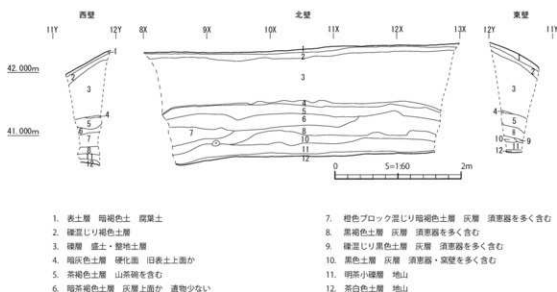
第4図 5トレンチ土層断面図

2. 6 トレンチ

6 トレンチは、5 トレンチで検出された灰層の北西の広がりを確認するため、5 トレンチの西側に1m北側に寄せて南北1m×東西5mのトレンチを設定した。グリッドとしては8X~13X、11Y~12Yにあたる。

表土層（1・2層）、整地土層（3層）が厚く堆積し、その下からトレンチ北側を中心に暗灰色土の旧表土面と考えられる硬化面（4層）が、トレンチ全面から旧整地土層と考えられる山茶碗を含む層（5層）が検出された。5層の下層から、レベル41.0~41.3m付近で灰層上面とみられる土層（6・8層）を確認した。トレンチ西側のみで検出された暗茶褐色の灰層（6層）には遺物は少ない。黒褐色で遺物を多く含む灰層（8層）はトレンチ全面で確認され、5 トレンチで検出された灰層に対応するものと考えられる。その下層には11Y・11X~13X、12Y・9X~13X付近で、須恵器・窯壁を多く含む黒色土層（9・10層）が10~20cm程度堆積しており、またトレンチ西側8X~9Xにかけては黒色系の土層が薄くなることから、6 トレンチ東側に灰原の中心があることが想定される。

(大塚)



第5図 6 トレンチ土層断面図

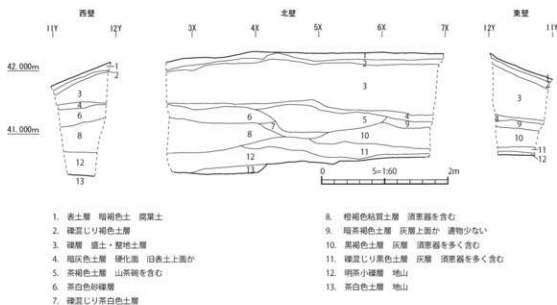
3. 7トレンチ

7トレンチは5・6トレンチの西側に設定した。標高約42～43mの緩斜面地に位置しており、東西約5.0m×南北約1.0mの調査区である。グリッドとしては2X～7X、11Y～12Yにあたる。

7トレンチの堆積状況は、5・6トレンチと同様に15～20cmの表土層（1・2層）の下層に、約70cmの整地土（3層）が堆積する。この整地土を除去すると、旧表土と考えられる暗灰色土層（4層）を検出した。4層は硬化が認められる。遺物は出土しなかった。4層の下層で山茶碗を含む土層（5層）を確認した。5層はトレンチの中央部付近でのみ確認でき、東・西壁では確認できなかった。6・7層はトレンチ中央部から西部にかけて確認した無遺物層である。8～11層中からは須恵器が出土した。とくに、10・11層は灰層と考えられ、遺物の出土量が8・9層と比べて多い。12・13層は地山で、地山上面は標高約40.6m～40.8mである。12層は礫を含む堆積であるが、13層は茶白色土であった。

7トレンチからはH-118号窟に関する灰層を検出した。5・6トレンチと同様の堆積状況を呈しており、4層下面には山茶碗を含む堆積（5層）が確認できる。さらに下面には須恵器を含む灰層を確認した。なお、6トレンチで検出した窯壁は、7トレンチでは検出できなかった。また、須恵器を多く含む10・11層は5X付近を端部としてトレンチ東部へのみ堆積することから、窯体は7トレンチよりも北東に位置する可能性が高いと考えられる。

(小林)



第6図 7トレンチ土層断面図

4. 8 トレンチ

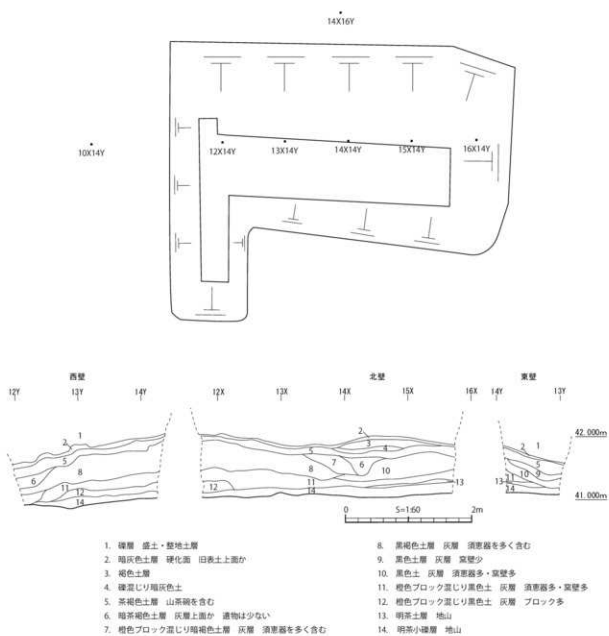
8 トレンチは5・6 トレンチの北、7 トレンチの北東、標高約44～46mの斜面地に設定した。トレンチは、南北幅が東端で約2.7m、西端で約4.0m、東西幅は約5.6mを測る調査区である。トレンチ南西隅の拡張区は、6 トレンチとの堆積状況を比較するために拡張した。グリッドとしては11X～17X、12Y～16Yにあたる。

8 トレンチの堆積状況は、盛土・整地土層（1層）が現況地表面から標高約41.6m～42.0mまで厚く堆積している。整地土下面の2層は暗灰色土層で硬化が認められ、旧表土と考えられる。2層中から遺物は出土しなかった。3・4層は無遺物層で、トレンチ中央部やや東寄りに部分的に堆積していた。そのため、トレンチ大部分において2層下面で5層を検出した。5層は茶褐色土層で、山茶碗が出土する。トレンチ全体に堆積しており、5・6 トレンチ全体と7 トレンチの一部に同様の堆積が認められる。5層を除去すると、須恵器や窯壁を含む堆積（6～11層）を確認した。いずれの層も灰層と考えられる。6層はトレンチ中央部と南西部にかけて確認した。暗茶褐色土層で、遺物の出土量は7～11層と比べて少ない。灰層の中でも最上層に近い堆積の可能性がある。7層はトレンチ中央部のみで確認し、橙色ブロック土混じりの暗褐色土層である。8層はトレンチ中央部から西部にかけて確認し、堆積は黒褐色土層である。7・8層のいずれからも須恵器が多数出土した。9～11層からは須恵器が出土したほか、窯壁を検出した。9層はトレンチ東部でのみ確認した黒色土層で、量は比較的少ないが窯壁を検出した。10層は9層と同じくトレンチ東部でのみ確認した黒色土層で須恵器及び窯壁を多く含む。11・12層は橙色ブロック土混じりの黒色土層で、11層中には須恵器や窯壁を多く含む。橙色ブロック土は焼土の可能性もある。11層はトレンチ全体に堆積しているが、12層はトレンチ西部にのみ堆積する。9～11層を除去したところ、地山（13・14層）を検出した。13・14層は明茶色土層もしくは礫層である。地山上面の標高は約40.85m～41.30mを測り、東壁・北壁ほど高く、西壁・南壁ほど低い。

6層がトレンチ中央部から西部にかけて堆積していることや、地山である13・14層の標高が東から西、北から南に傾斜していることなどから、当該地の旧地形は北東から南西に向けて傾斜していたと考えられる。（しかし、7 トレンチ中央部から西部は地山がわずかに窪むため、小谷を形成していた可能性が残る。）また、窯壁及び焼土と考えられる橙色ブロック土を含む堆積（11・12層）がトレンチ全体に堆積していることから、窯体は8 トレンチのほぼ北側に位置していた可能性が高い。

以上、窯体の位置と旧地形の傾斜方向から、8 トレンチ南の近接した箇所位置する5 トレンチではトレンチ西部にしか須恵器を含む灰層が堆積せず、8 トレンチ南西に位置する6 トレンチでは須恵器を含む灰層がトレンチ全体に堆積したと推定される。

（小林）



第7図 8 トレンチ平面図および土層断面図

第5章 遺物

本章ではH-118号窟出土遺物の観察所見を記す。H-118号窟からは蓋杯・高杯・壺・提瓶・甕・甌などが出土している。以下では各トレンチの出土遺物を器種ごとに分類し、所見と実測図を示していく。詳細については、第6章にて蓋杯類を対象とした考察が行われているので、そこらもあわせて参照されたい。

5 トレンチ出土遺物

山皿（第8図1）

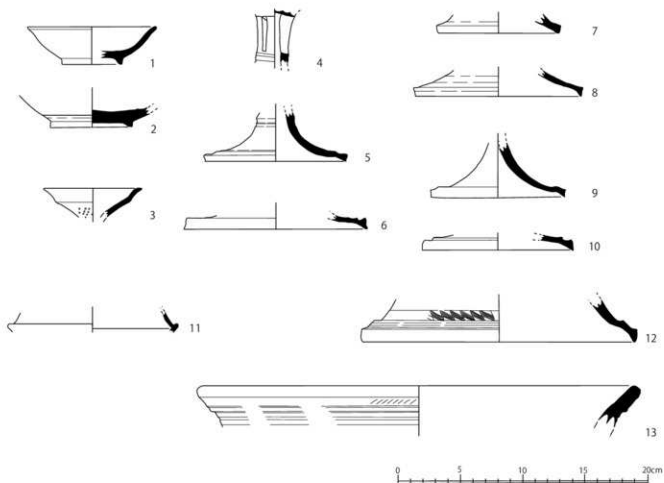
口径は10.2cm。高台から口縁部まで残存している。内側に重ね焼きの痕が残る。

山茶碗（第8図2）

口縁部は欠落している。高台径は5.7cm。

甌（第8図3）

口径は7.6cm。下段に列点文が認められる。



第8図 5トレンチ出土遺物実測図（1～6：包含層 7～13：灰層）

高杯 (第8図4~10)

4~10 全て脚部である。4と9には透かし窓があり、4については二段透かしが認められる。

蓋杯 (第8図11)

杯身である。最大径は13.6cm。口縁部は欠落している。

器台 (第8図12)

器台は脚部片が出土している。突帯の上に波状文が認められる。

甕 (第8図13)

口径は34.2cm。わずかに列状の線文が認められる。

6 トレンチ出土遺物

蓋杯 (第9図14・16~42)

16~26は杯蓋である。口径は最小で9cm、最大で11.8cmとなっている。

14・27~42は杯身である。口径は最小で7.4cm、最大で11.0cmとなっている。なお31については杯身と杯蓋が融着している。

碗 (第9図15)

口径は12.2cm。体部に二段の沈線がめぐらされている。

高杯 (第10図43~49)

43~44が杯部で、45~49は脚部である。杯部には2点とも波状文が認められる。脚部には透かし窓が認められ45は二段透かしとなっている。

瓶類 (第10図51~53)

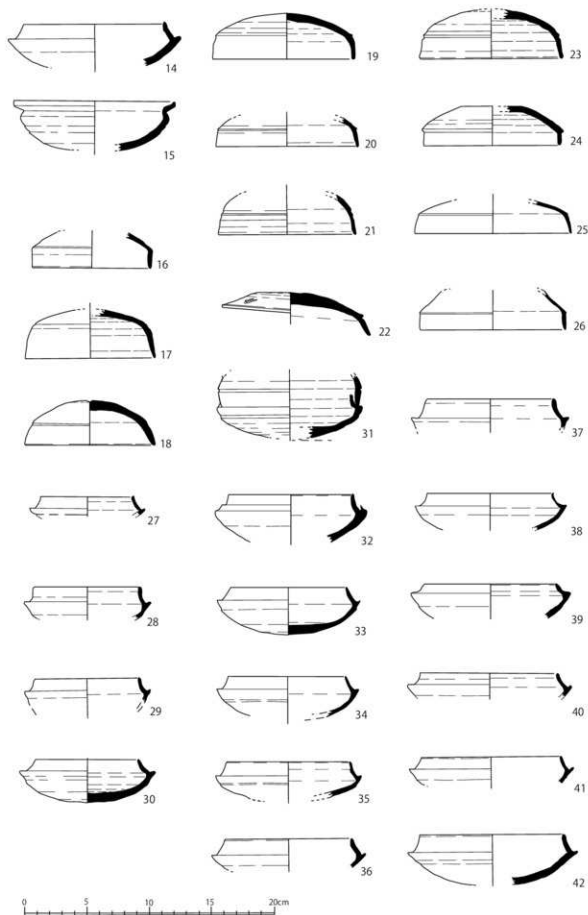
口径は最小で3.4cm、最大で9.5cmである。51は頸部に二段の沈線が認められる。

壺類 (第10図54)

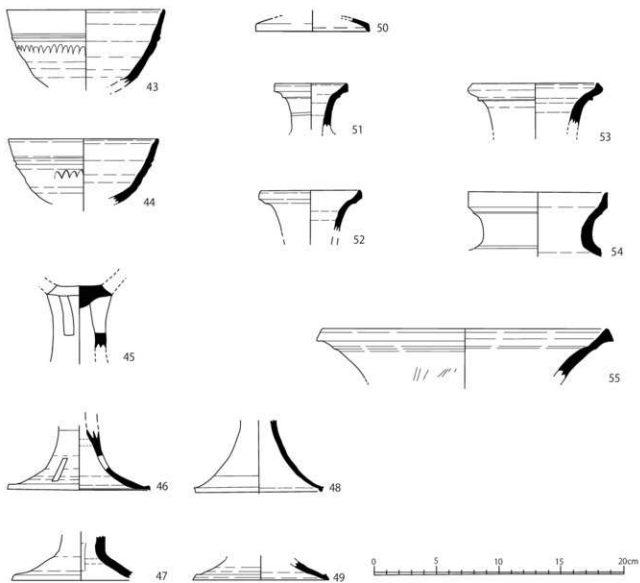
口縁部に二段の突帯が認められる。

甕 (第10図55)

口径は22.4cm。列線文が認められる。



第9図 6トレンチ出土遺物実測図(1) (14・15:包含層 その他:灰層)



第10図 6トレンチ出土遺物実測図(2)

7 トレンチ出土遺物

蓋杯 (第11図 56~64)

いずれも杯身である。口径は最小で8.2cm、最大で13.4cmとなっている。

高杯 (第11図 65~70)

65が杯部と脚部で、66~70は脚部のみである。65は脚部に透かし窓があり、杯部には列線文が巡らされている。脚部についても、70には透かし窓が認められる。

瓶類 (第11図 71~72)

それぞれの口径は71が6.6cm、72が11.1cmである。72では「○」と描いた線刻が二重沈線の上部にうっすら認められる。

甕 (第11図 73)

最大径は8.2cm。差し込み口の中心から割れているため、断面の形状がよくわかる。体部には線刻を巡らせている。

8 トレンチ出土遺物 (包含層)

蓋杯 (第12図 74~76)

いずれも杯身である。口径は最小で10.6cm、最大で12.0cmとなっている。

高杯 (第12図 77~82)

77~79が杯部で、80~82は脚部である。杯部の口径は最小で16.4cm、最大で18.4cmとなっている。脚部には全て透かし窓が認められる。

壺類 (第12図 83)

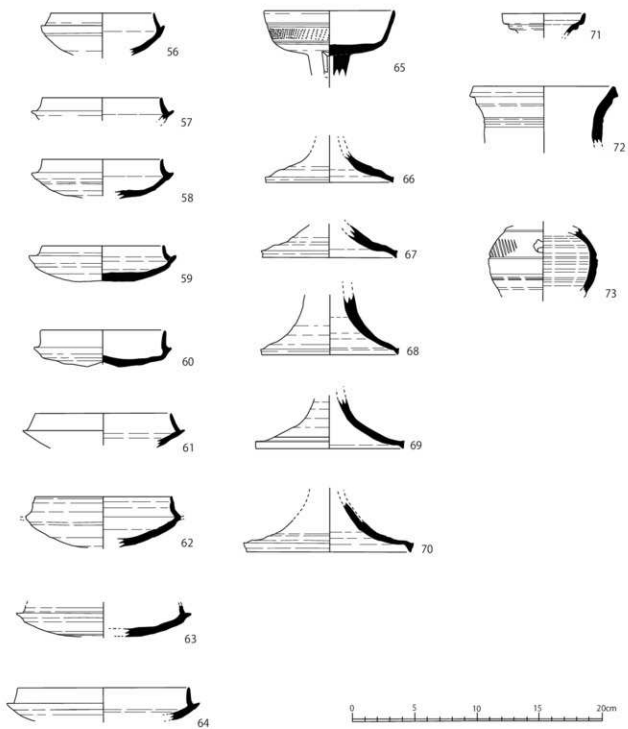
口径は11.4cmで、口縁部に二段の突帯が巡る。肩部にはあて具の痕が認められる。

瓶類 (第12図 84)

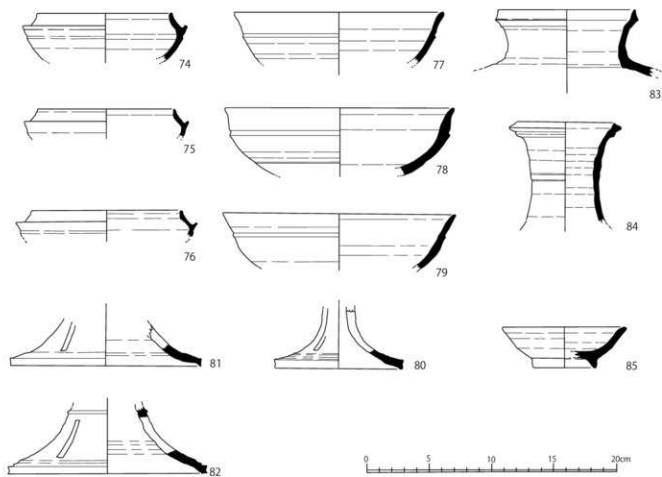
口径は7.4cm。頸部に二重の沈線が巡る。

山皿 (第12図 85)

口径は9.8cm。高台から口縁部まで残存。内面全体に降灰している。



第11図 7トレンチ出土遺物実測図



第12図 8トレンチ出土遺物実測図(1)

8トレンチ出土遺物(灰層)

蓋杯(第13・14図86~153)

86~115は杯蓋である。口径は最小で9.0cm、最大で14.2cmである。

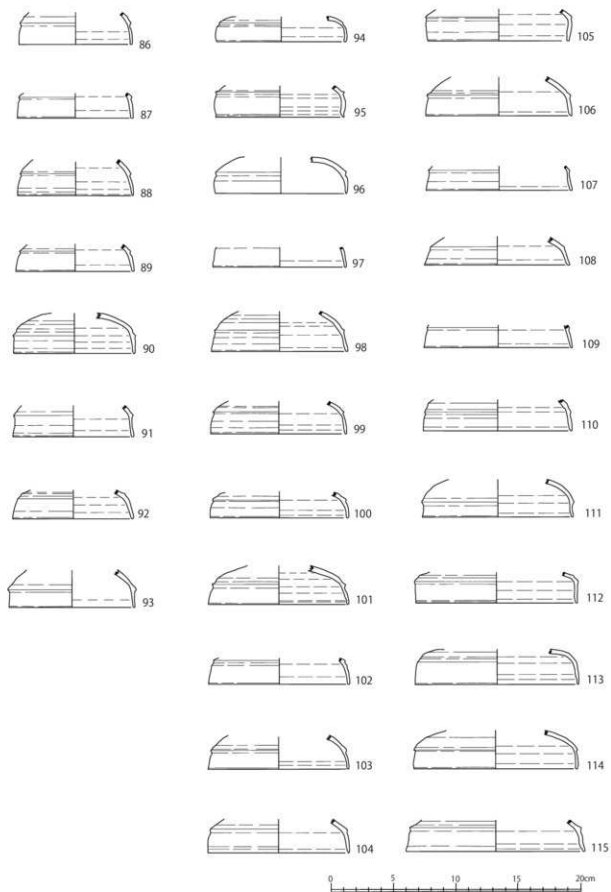
116~153は杯身である。口径は最小で6.8cm、最大で12.4cmとなっている。

なお、8トレンチから出土した蓋杯を中心に、第6章にて詳述の上考察している。

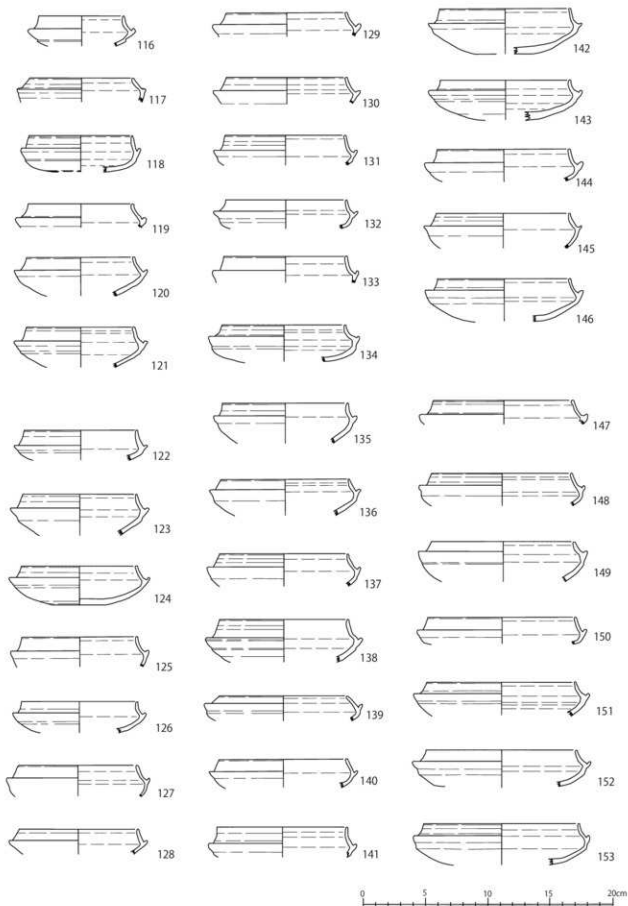
高杯(第15図154~167)

154~156が杯部で、157~167は脚部である。ただし、166・167は杯部も一部残存している。

杯部の口径は最小で10.2cm、最大で18.0cmとなっている。脚部には透かし窓があるものとなないものがある。167では透かし窓ではなく二重の突線を巡らせている。



第13図 8トレンチ出土遺物実測図(2)



第14図 8トレンチ出土遺物実測図(3)

瓶類 (第14図 168～173)

瓶類は小型品と大型品に分かれ、168～170の口径が6.2cm～8.4cmなのに対し、171～173は12.4cm～14.6cmとなっている。いずれも口縁部に突帯、頸部に沈線を巡らす資料が多い。

提瓶 (第14図 174)

口縁部および体部の大半は失われているが、肩部の耳が一か所残存している。耳のすぐ隣には甕の削片が融着している。器表面には叩き目が一面に認められ、内部には窯体片が付着している。

甕 (第14図 175)

口径は27.4cm。口縁部の下方に列点文が認められる。

甕 (第15図 176～177)

176は甕の上部、177は体部である。176の口径は11.0cmで、177の最大径は11.2cmである。177は体部中央に列線文が認められる。

土錘 (第15図 178)

片方の端部が欠けた土錘である。最大径は1.0cm。

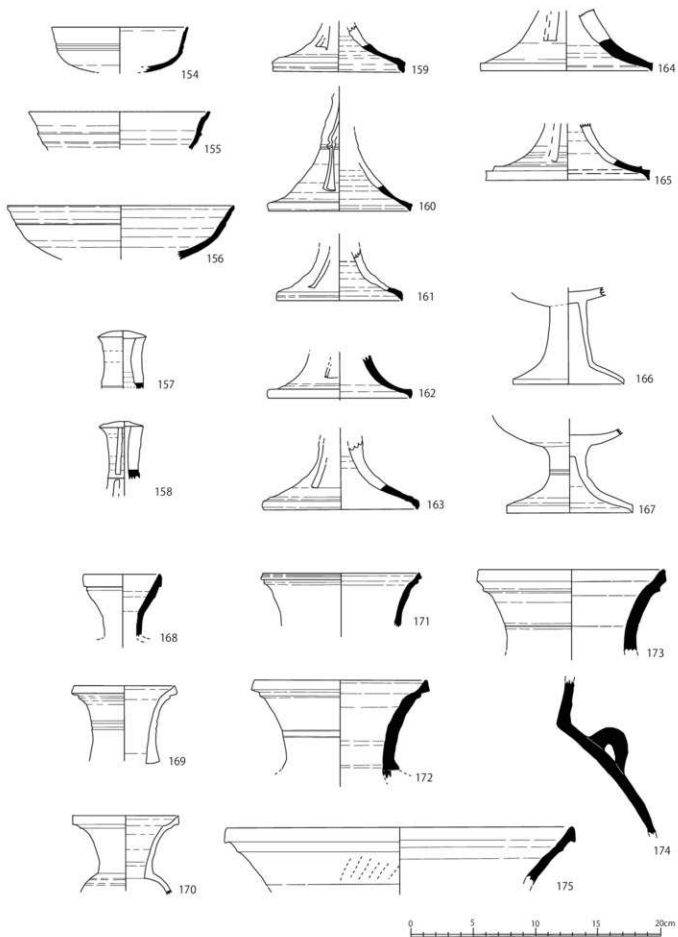
播鉢 (第15図 179)

扁平な粘土板から器面が立ち上がる。底面には穴がない。

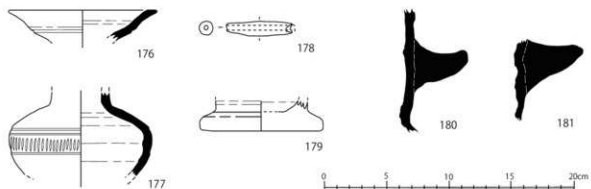
甕 (第15図 180～181)

180・181共に体部と把手が残存している。180は器面全体に櫛目がついている。

(井上)



第15図 8トレンチ出土遺物実測図(4)



第16図 8トレンチ出土遺物実測図(5)

第1表 実測図掲載遺物一覧表

No.	写真	器形	トレンチ	出土グリッド	出土層位	口径(mm)	最大径(mm)	器高(mm)	残存(%)	重み
1		山皿	5	15X11Y	茶褐色土	102		30		
2		山茶碗	5	13X11Y	旧表土					
3		皿	5	15X11Y	暗灰色土	76				
4		高杯	5	13X11Y	旧表土					
5		高杯	5	13X11Y	暗灰色土				25	
6		高杯	5	15X11Y	旧表土				12	
7		高杯	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)				25	○
8		高杯	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)				12	
9		高杯	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)				25	
10		高杯	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)				12	
11		杯身	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)	108	136			
12		器台	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)				10	
13		壺	5	13X11Y	礫混黒色土(灰層)	342				
14		杯身	6	9X12Y	茶褐色土	106	132		13	
15	8	碗	6	10X12Y	茶褐色土	122			9	
16		杯蓋	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)	90			10	
17		杯蓋	6	10X12Y	黒色土(灰層)	98	32		19	
18		杯蓋	6	12X12Y	黒褐色土(灰層)	102		36	21	
19	1	杯蓋	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)	112		36	90	
20		杯蓋	6	10X12Y	黒褐色土(灰層)	107			14	
21		杯蓋	6	10X12Y	黒色土(灰層)	103			18	
22		杯蓋	6	12X12Y	暗褐色土(灰層)				40	
23		杯蓋	6	10X12Y	黒色土(灰層)	107	37		21	
24		杯蓋	6	10X12Y	礫混黒色土(灰層)	104	30		18	
25		杯蓋	6	8X12Y	黒褐色土(灰層)	118			10	
26		杯蓋	6	12X12Y	黒色土(灰層)	108			13	
27		杯身	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)	74	92		14	
28		杯身	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)	84	100		16	
29		杯身	6	12X12Y	黒色土(灰層)	80	96		7	
30		杯身	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)	83	108	34	18	
31		杯蓋				105			29	
		杯身	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)	92			29	
32		杯身	6	12X12Y	暗褐色土(灰層)	94	116		18	
33		杯身	6	12X12Y	黒色土(灰層)	94	114	36	25	
34		杯身	6	12X12Y	暗褐色土(灰層)	92	114		25	
35		杯身	6	12X12Y	暗褐色土(灰層)	98	116		11	
36		杯身	6	11X12Y	暗灰色土	96	120		7	
37		杯身	6	8X12Y	暗褐色土(灰層)	96	120		13	
38	4	杯身	6	9X12Y	黒褐色土(灰層)	100	122		26	
39		杯身	6	12X12Y	黒色土(灰層)	100	122		14	
40		杯身	6	10X12Y	黒色土(灰層)	110	132		14	
41		杯身	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)	106	124		10	
42		杯身	6	8X12Y	暗褐色土(灰層)	110	128	38	13	
43		高杯	6	8X12Y	黒褐色土(灰層)	124			20	
44		高杯	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)	118			19	
45		高杯	6	8X12Y	暗褐色土(灰層)					
46		高杯	6	12X12Y	黒色土(灰層)				36	
47		高杯	6	11X12Y	黒色土(灰層)				16	
48		高杯	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)				25	
49		高杯	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)				16	
50		杯蓋	6	9X12Y	暗褐色土(灰層)	86			21	
51		瓶頸	6	11X12Y	暗褐色土(灰層)	34			11	
52		瓶頸	6	12X12Y	暗褐色土(灰層)	76			21	
53		瓶頸	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)	95			39	
54	10	壺頸	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)	11			43	
55		壺	6	10X12Y	暗褐色土(灰層)	224			11	
56		杯身	7	6X12Y	灰層2回目	82	98	34	5	
57		杯身	7	5X12Y	灰層	94	104		21	
58		杯身	7	6X12Y	灰層3回目	96	112	32		
59		杯身	7	6X12Y	灰層上面	96	116	28		
60		杯身	7	6X12Y	灰層3回目	98	110			
61		杯身	7	6X12Y	灰層2回目	106	128		8	
62		杯身	7	5X12Y	灰層3回目	108	124	40		
63		杯身	7	6X12Y	灰層2回目	120	138	28		
64		杯身	7	6X12Y	灰層2回目	134	152		17	

No.	写真	器形	トレンチ	出土グリッド	出土層位	口径(mm)	最大径(mm)	器高(mm)	残存(%)	審み
65		高杯	7	6X12Y	黒褐色土(灰層)	104				
66		高杯	7	4X12Y	灰層上面					
67		高杯	7	6X12Y	確認黒色土(下層灰層)					
68		高杯	7	5X12Y	灰層2回目					
69		高杯	7	4X12Y	灰層1回目				18	
70		高杯	7	4X12Y	灰層2回目					
71		瓶頸	7	5X12Y	灰層1回目	66			22	
72		瓶頸	7	6X12Y	灰層3回目	111				
73		踵	7	5X12Y	灰層3回目		82			
74		杯身	8	16X14Y	表土	106	130		16	
75		杯身	8	14X14Y	壁面清掃	108	130		16	
76		杯身	8		庵土	120	136		18	
77		高杯	8	15X14Y	表土	164			13	
78		高杯	8	16X14Y	表土	180			16	
79		高杯	8	13X15Y	表土	184			20	
80		高杯	8	15X14Y	表土				25	
81		高杯	8	13X15Y	表土				16	
82		高杯	8	14X14Y	壁面清掃				10	
83	9	壺頸	8	16X14Y	表土	114			30	
84		瓶頸	8	15X14Y	表土	74			20	
85		山根	8	16X14Y	暗灰修地土	98			30	
86		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層3回目	90			11	○
87		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層1回目	92			11	○
88		杯蓋	8	16X14Y	灰層3回目	92			5	
89		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層3回目	94			12	○
90		杯蓋	8	14X14Y	灰層2回目	96			13	○
91		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層5回目	96			10	○
92		杯蓋	8	14X14Y	灰層4回目	96			5	
93		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層3回目	100			10	○
94		杯蓋	8	14X14Y	灰層2回目	102			10	○
95		杯蓋	8	16X14Y	灰層3回目	102			4	○
96		杯蓋	8	15X14Y	灰層3回目	104			18	
97		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層4回目	106			13	
98		杯蓋	8	14X14Y	灰層4回目	108			7	
99		杯蓋	8	16X14Y	灰層3回目	108			10	
100		杯蓋	8	16X14Y	灰層3回目	110			12	
101		杯蓋	8	14X14Y	灰層2回目	112			10	
102		杯蓋	8	14X14Y	灰層2回目	112			6	
103		杯蓋	8	14X14Y	灰層3回目	112			10	○
104		杯蓋	8	15X14Y	灰層1回目	112			22	
105		杯蓋	8	16X14Y	灰層1回目	112			15	
106		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層5回目	116			13	
107		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層1回目	116			13	
108		杯蓋	8	15X14Y	灰層2回目	116			11	○
109		杯蓋	8	14X14Y	灰層1回目	118			23	
110		杯蓋	8	15X14Y	灰層2回目	118			15	
111		杯蓋	8	14X14Y	灰層3回目	120			10	○
112		杯蓋	8	14X14Y	灰層4回目	128			11	○
113		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層1回目	130			8	○
114		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層5回目	130			14	○
115		杯蓋	8	12-13X14Y	灰層4回目	142			10	
116		杯身	8	15X14Y	灰層3回目	68	86		7	
117		杯身	8	12-13X14Y	灰層4回目	82	102		10	
118		杯身	8	14X14Y	灰層1回目	82	97		9	○
119		杯身	8	15X14Y	灰層2回目	84	104		9	
120		杯身	8	12-13X14Y	灰層3回目	86	104		13	
121		杯身	8	12-13X14Y	灰層4回目	86	104		10	○
122		杯身	8	12-13X14Y	灰層5回目	92	106		12	
123		杯身	8	14X14Y	灰層4回目	92	110		19	
124		杯身	8	12-13X14Y	灰層4回目	92	110	31	21	
125		杯身	8	12-13X14Y	灰層5回目	92	110		16	○
126		杯身	8	15X14Y	灰層1回目	92	106		15	
127		杯身	8	12-13X14Y	灰層5回目	94	114		16	
128		杯身	8	15X14Y	灰層3回目	94	110		10	
129		杯身	8	12-13X14Y	灰層3回目	96	118		11	
130		杯身	8	14X14Y	灰層2回目	96	117		14	○
131		杯身	8	14X14Y	灰層4回目	96	114		8	

No.	写真	器形	トレンチ	出土グリッド	出土層位	口径 (mm)	最大径 (mm)	器高 (mm)	残存 (%)	蓋み
132		杯身	8	15X14Y	灰層 1 回目	96	114		12	
133		杯身	8	12-13X14Y	灰層 3 回目	98	116		15	
134	2	杯身	8	12-13X14Y	灰層 4 回目	98	120		13	
135		杯身	8	12-13X14Y	灰層 1 回目	100	114		13	○
136		杯身	8	12-13X14Y	灰層 3 回目	102	120		15	
137		杯身	8	12-13X14Y	灰層 4 回目	102	122		16	
138		杯身	8	12-13X14Y	灰層 4 回目	102	124		8	
139		杯身	8	15X14Y	灰層 2 回目	102	126		14	
140		杯身	8	15X14Y	灰層 5 回目	102	118		16	
141		杯身	8	16X14Y	灰層 2 回目	104	118		6	
142		杯身	8	12-13X14Y	灰層 5 回目	104	122	36	7	
143	3	杯身	8	16X14Y	灰層 4 回目	104	122		23	
144		杯身	8	12-13X14Y	灰層 3 回目	106	126		10	
145		杯身	8	14X14Y	灰層 1 回目	106	126		21	
146		杯身	8	14X14Y	灰層 3 回目	106	126		18	
147		杯身	8	12-13X14Y	灰層 4 回目	112	134		15	○
148		杯身	8	14X14Y	灰層 4 回目	112	132		13	
149		杯身	8	15X14Y	灰層 1 回目	114	134		19	
150		杯身	8	14X14Y	灰層 3 回目	118	135		6	
151		杯身	8	14X14Y	灰層 1 回目	119	140		16	○
152		杯身	8	15X14Y	灰層 1 回目	120	142		8	○
153		杯身	8	14X14Y	灰層 4 回目	124	140		11	○
154		高杯	8	12-13X14Y	灰層 1 回目	102			22	
155		高杯	8	12-13X14Y	灰層 4 回目	144			9	
156		高杯	8	15X14Y	灰層 3 回目	180			11	
157		高杯	8	12-13X14Y	灰層 5 回目					
158		高杯	8	16X14Y	灰層 3 回目					
159		高杯	8	15X14Y,16X14Y	灰層 2・3 回目				25	
160		高杯	8	12X13Y,14X14Y	灰層 1・4 回目				75	○
161		高杯	8	12X13Y	灰層 1 回目				25	
162		高杯	8	12X13Y	灰層 1 回目				21	
163	6	高杯	8	16X14Y	灰層 2 回目				25	
164		高杯	8	15X14Y	灰層 2 回目					
165		高杯	8	16X14Y	灰層 3 回目					
166		高杯	8	14X14Y	灰層 4 回目					
167	5	高杯	8	16X14Y	灰層 1 回目					
168		瓶頸	8	16X14Y	灰層 3 回目	62			37	
169	12	瓶頸	8	15X14Y	灰層 2 回目	80			25	
170		瓶頸	8	15X14Y	灰層 4 回目	84			7	
171		瓶頸	8	12X13Y	灰層 3 回目	124			15	
172		瓶頸	8	16X14Y	灰層 2 回目	146			50	○
173		瓶頸	8	12X13Y	灰層 3 回目	146			20	
174	11	提瓶	8	15X14Y	灰層 3 回目					
175	13	壺	8	15X14Y	灰層 1 回目	274			17	
176		甕	8	15X14Y	灰層 4 回目	110			17	
177	7	甕	8	16X14Y	灰層 1・2 回目		112			
178	16	土鍾	8	12-13X14Y	灰層 3 回目	10		50	28	
179		榑鉢	8	15X14Y	灰層 4 回目				50	
180	14	甌	8	16X14Y	灰層 2 回目					
181	15	甌	8	15X14Y	灰層 2 回目					

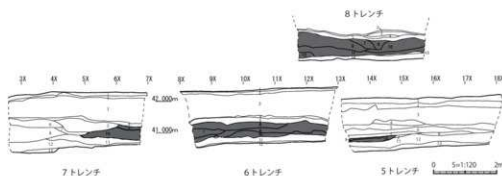
第6章 考 察

1. 遺 構

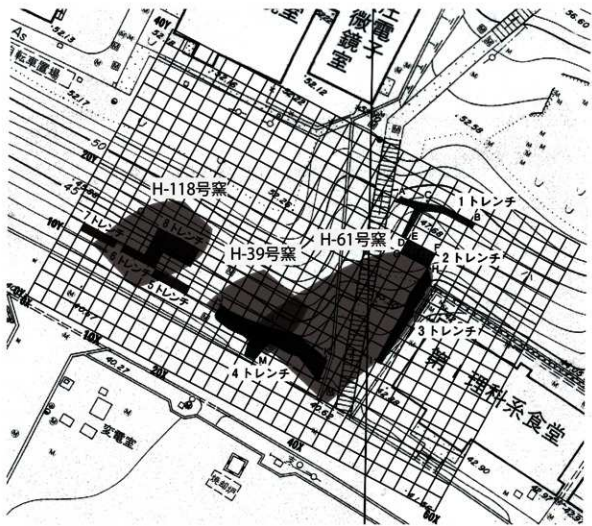
本調査では5～8トレンチのいずれからも、黒色系の灰層が確認できた。第17図は5～8トレンチの北側土層断面図を合成したものであるが、本調査で確認された灰層は、5トレンチの15X地点と7トレンチの5X地点を東西の端部として、レンズ状に堆積していた。2003年調査の4トレンチ下層灰層には連続せず、出土遺物の年代も異なることから、別の窯跡の灰層であることが判明した。H-39号窯については、愛知県陶磁美術館保管の分布調査時資料を大西遼氏が整理報告しており（大西2018）、その成果から、H-61号窯下層灰層の遺物（H-10号窯期:6世紀前葉）と近似していることがあきらかになっている。過去の報告書（尾野・梶原編2010）でも示したとおり、これがH-39号窯の灰層であり、本調査の灰層はこれとは異なる。ゆえに本窯については、本報告書刊行にあたって、2020年に新規発見窯（東山118号窯）として登録した。

またこの灰層は斜面上方の8トレンチにも、厚みを増しつつ連続していた。8トレンチでは15X～16X地点よりもさらに東方に灰層が広がっているようであり、窯体が残存するとしたら、斜面の北東上方であると思われる。

（梶原）



第17図 5～8トレンチ土層断面図合成図



第18図 H-118・61・39号窯灰層分布想定図 (500分の1)

2. 遺物

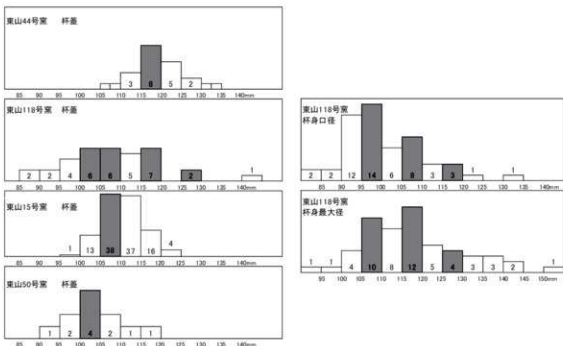
本節ではH-118号室の出土遺物について考察していく。H-118号室の灰層からは、蓋杯・高杯・瓶壺類・甕・甕・甕の出土が確認できた。器種としては甕の破片が最も多く出土し、その次に蓋杯が多く出土している。この中から、もっとも多く出土した8トレンチ出土遺物を中心に、出土層位が明らかなのと遺存状況のよい杯類（杯蓋・杯身）を中心に分析をおこなった。

1) 遺物の概要

①杯H蓋（第13図など）

形態はほぼ全てが明確な稜（側部と頂部の境）を持つものである。体部はまっすぐ立ち上がるもの（86・87・90など）、湾曲して内側を向くもの（94・95など）、外に広がるもの（108・115など）の3種類に大別することができるが、基本的にはどれも同種のものであると考えられる。口縁内側端部に沈線ないしは凹線を有するものがほとんどである。ケズリに関して観察できるものは少なかったが、98などをみると頂部の約6~7割程度まで施されていた。

口径は完形のものが出土していないため、全て推定である。口径の平均は109.6mmであるが、口径が10分の1以上残存している個体から口径の平均を算出すると114.7mmとなった。口径の幅は90~142mmの間でかなりバラツキが大きい。第18図の法量分布図をみると、口径101~110mm、116~120mmあたりを中心にもっとも多く分布しているが、そのほかにも口径126~130mm以上の大型品も一定数確認できることがわかる。



第19図 H-118・44・15・50号室杯類法量分布図（尾野1999を参考に作成）

②杯H身（第14図など）

形態は全て蓋受けと立ち上がりを伴うもので、その間に沈線が施されているものがほとんどである。蓋受けは短く、上を向いている。立ち上がりが長いもの（131・138など）と短いもの（143・149など）、立ち上がりが湾曲するもの（126・134など）と直線的なもの（128・140など）、上を向くもの（134・138など）と内傾するもの（117・139など）に大別できるが、どれも同種のものであると考えられる。蓋受け部の下部にゆるい一段を有する、もしくは体と蓋受けがやや角度を変えているものがほとんどである。また、口縁内側部に沈線または凹線を有するものがほとんどである。ケズリは蓋と同様に確認できるものは少なかったが、118・124からは底部の約6～7割程度まで施されていることがわかる。

口径は完形のものが出土していないため全て推定である。最大径（蓋受け部の口径）の平均は117.1mmであるが、口径が10分の1以上残存している個体から最大径の平均を算出すると117.5mmとなった。こちらも杯蓋と同様、個体によってかなりバラツキがみられるが、法量分布図をみると、口径96～100mm、最大径106～110mm前後、口径106～110mm、最大径116～120mm前後、口径116～120mm、最大径126～130mm前後と、大きく3つの山が確認でき、杯蓋の法量分布の状況とほぼ一致する。

③高杯（第15図など）

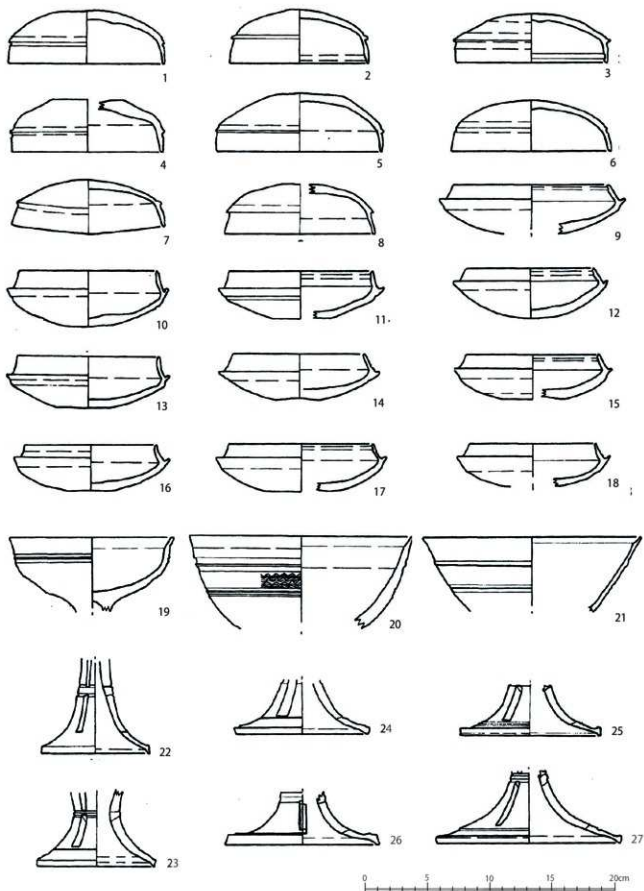
形態は、出土しているものは全て無蓋高杯で、有蓋高杯は確認されていない。脚部に関しては、長脚2段のものが多く大半が3方スカシだが、157のように2方スカシを有するものも出土している。また、166・167など短脚無スカシの高杯もわずかに出土している。杯部は口径のわかる個体は少ないものの、100mm前後の小型品（154など）と、140mm前後の中型品（155など）、180mmを越える大型品（156など）が確認できる。

2) H-118号室と隣接時期の諸室の遺物

本項では、H-118号室出土遺物との比較を目的として、時期的に隣接すると考えられる東山諸室の出土遺物について、その特徴を分析する。

①H-44号室（第20図）

H-44号室は、同室式の標式資料であり、窟跡1基と付属する灰層の一部が発掘調査されている。灰層は70cmの堆積が確認されている。研究者ごとの編年観は第2表に示したが、齋藤孝正氏の編年では第Ⅱ期第3小期にあたとされ、生産規模が大きく拡大する時期であり、尾張においても古墳の内部主体へ次第に須恵器が多量に副葬されるようになり、住居跡からの出土も増加すると述べている。城ヶ谷和広氏の編年ではⅡ期第4小期に当たり、尾張でも群集墳の造営が盛んとなり、副葬品など大量の需要があった時期とされている。また、尾野善裕氏の編年においてはⅢ期中段階にあたる。Ⅲ期は杯H・無蓋高杯が主流で口径が縮小化し口縁部の立ち上がりが内傾、高杯は長脚化し2段スカシが出現・盛行するとされており、その中で中段階は、蓋杯に関して口径は120mm前後が中心で、高杯に関しては無蓋高杯のみ確認され、長脚2段3方スカシが



第20图 H-44号窟出土遗物实测图(小島1979)

主流であると述べられている。

H-44号室からは杯H・無蓋高杯・瓶壺類・甕・甗・甗などが出土している。

杯H蓋(1~8)は、体部はほとんどの個体がほぼ垂直に下るものだが、8のように、外へ開いているものも数点存在している。ただ、基本的にはどれも同種のものであると考えられる。ほぼ全てが明確な稜を有し、比較的浅い体ものが多い。口縁内側端部に沈線ないしは凹線を有するものがほとんどである。また、ケズリは頂部の約6~7割程度まで施されているものがほとんどである。杯蓋の口径の平均は119mmとなっている。若干厚手に作られているものを何個か確認することができた。

杯H身(9~18)は、全て蓋受けと立ち上がりがあり、その間に沈線を有するものがほとんどである。蓋受けは短く上を向いている。立ち上がりは蓋受けの端近くからやや湾曲してのびるものが多く、内傾気味にやや長くのびたものがほとんどである。蓋受け部の下部にゆるい一段を有する、もしくは体と蓋受けがやや角度を変えているものがほとんどである。口縁端部内側に沈線または凹線を有するものが大半である。また、ケズリは底部の約6~7割程度まで施されていることが確認できた。杯身の最大径の平均は125mmである。身に関しても若干厚手に作られているものが存在している。また、10のように体部が深いものと17のように浅いもの、底部が12のように丸底のもの、13のように平底のものが存在する。

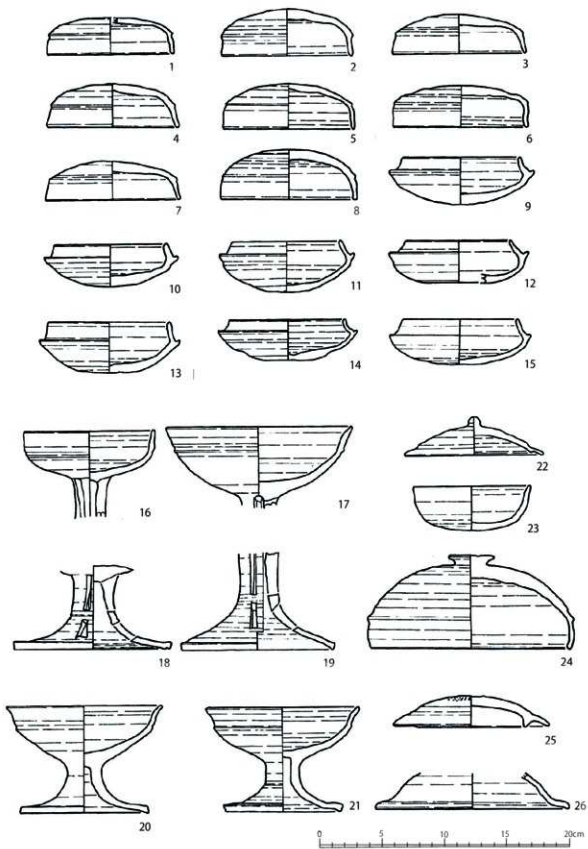
高杯(19~27)については、出土しているものは全て無蓋高杯であり、有蓋高杯は確認されていない。脚部は長脚2段3方スカシをもつものが主で、短脚無スカシ高杯の出土は少数である。杯部は19のように小さいものもあるが、20・21のように大径で深いものが多い。

②H-15号室(第21図)

H-15号室は、窯跡1基と灰層の大部分が発掘調査されている。灰層は最大1mにおよぶ厚いものである。斎藤編年では第Ⅲ期第1小期に位置付けられ、依然として群集墳の盛行により生産を拡大し面的にも広がりを見せるが、生産内容は供献用から供膳用へと大きく転換する時期であるとされている。城ヶ谷編年ではⅢ期第1小期にあたり、引き続き古墳に伴う副葬品を焼成する一方で、新しい供膳具を主とする次代の器種構成が登場する新旧交代の時期であるとされている。その中で第1小期は、蓋杯は基本的には古墳時代通有のもので東山44号室期と比べて口径が10mm程度縮小するが天井部のケズリは残り、またこの時期より宝珠つまみとかえりのついた杯蓋とセットになる無台杯身や盤類などの出現をみると述べられている。尾野編年ではⅢ期新段階にあたる。Ⅲ期新段階は、口径は110mm前後が中心で、杯Gが少量存在し(H-50のように確認されていない窯もある)、高杯は無蓋で長脚2段スカシのものと短脚無スカシのものが一定量存在、また窯によってスカシが2方ものものと3方ものものが存在すると述べられている。

H-15号室からは、杯H・無蓋高杯・瓶壺類・甕・甗・甗・杯Gなど、また蓋につける紐と思われる鳥形装飾が出土している。

杯H蓋(1~8)は、1・6などのように体部が垂直に下るものが大半であるが、4のようにやや外に開くものも何点か見られる。しかし、基本的には全て同じ種類のものだと考えられる。個



第21图 H-15号窑出土物实测图(瀬川2008)

体によって出具合に違いは見られるが、ほぼ全てが明確な稜を有するものである。H-44号窯と同様に比較的浅いものが中心である。口縁内側端部に沈線ないしは凹線を有するものと有しないものが同量程度出土している。ケズリもこれまでの2窯と同じく頂部の約6~7割程度まで施されている。杯蓋の口径の平均は110mmであり、H-44号窯と比べると小型化する。

杯H身(9~15)は全て蓋受けと立ち上がりがあり、その間に沈線を有するものがほとんどである。蓋受けは短く上を向いている。立ち上がりは蓋受けの端近くからやや湾曲してのびるものが多く、内傾気味のものが多い。立ち上がりの長さはH-44号窯のものに比べてやや短くなっている。蓋受け部の下部にゆるい一段を有する、もしくは体と蓋受けがやや角度を変えているものがほとんどである。蓋と同様に、口縁端部内側に沈線または凹線を有するものと有しないものが同量程度出土している。また、ケズリは底部の約6~7割程度まで施されている。杯身の最大径の平均は117.4mmである。こちらもH-44号窯と同様に平底のものと丸底のものが存在している。

高杯(16~21)はいずれも無蓋高杯である。脚部は18・19のような長脚2段3方スカシと、20・21のような短脚無スカシが同量程度出土している。杯部は17のように大径で深いものが多いが、H-44号窯と比べるとやや小さくなっている。

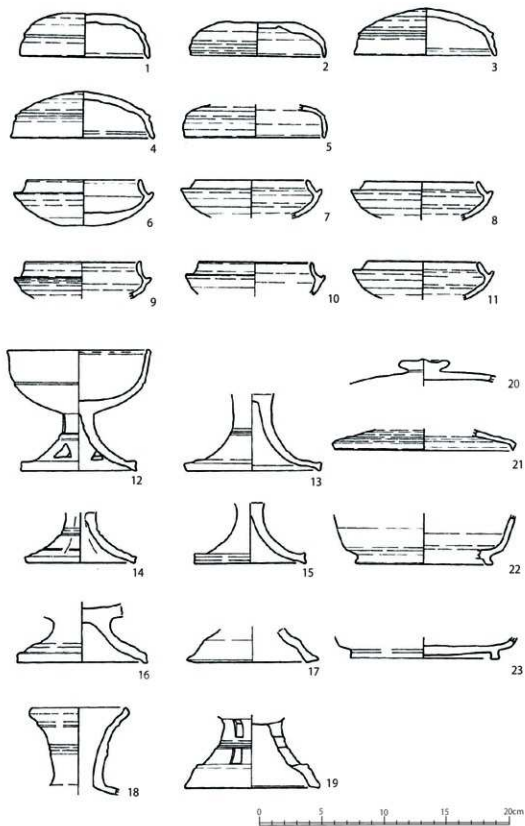
少量ではあるが、高台を伴わない身と、つまみを伴う蓋のセットで、杯Hより新しい器種とされる杯Gが出土している(22・23・25・26)。蓋は22・25のように内側に「かえり」を持つものである。つまみは22のように宝珠型で小さめである。口径は大きいものと小さいものがあり個体差がある。24は有蓋高杯の蓋と思われる。

③ H-50号窯(第22図)

H-50号窯は灰層の一部が発掘調査されている。斎藤編年では東山15号窯と同様に第Ⅲ期第1小期に位置付けられる。城ヶ谷編年ではこちらも東山15号窯と同様にⅢ期第1小期に位置付けられている。尾野編年においてはⅣ期古段階にあたる。Ⅳ期は、主要な杯が杯Hから杯A・Bに転換する時期であり、高杯も減少し、全体的に少数器種化していく時期であると述べられている。その中で古段階は、依然として杯Hが主流であり口径は100mm台が中心である一方、杯Bの生産が始まり、高杯はスカシがあるものが激減、大半が無スカシまたは切れ目化したものになる段階だとされている。

H-50号窯からは杯H・無蓋高杯・瓶壺類・甕・甌・甌・杯Bなどが出土している。

杯H蓋(1~5)は、2のように体部がほぼ垂直に下るもの、5のようにやや丸味があるもの、3・4のように外に聞き気味のものの3種類に分類できるが、基本的にどれも同種のものであると考えられる。H-50号窯の杯蓋に関しては研究者によって稜に関する意見が異なっている。斎藤氏は「明瞭な稜を有する」と述べているが、荻野繁春氏は論文の中で「天井部から口縁部へと素直にのびる僅かな段をみせるものが中心」、また尾野氏は「Ⅲ期までの杯Hにみられた蓋の肩部の稜は不明瞭化し凹線状の窪みを呈するものが多」と述べている(荻野1981、斎藤1988、尾野1997a)。今回は、1・3のような明確な稜をもつものと、2・5のような稜がやや不明瞭化したも



第22图 H-50号窟出土遗物实测图(瀬川2008)

のが存在していることから、稜は退化傾向にあると判断した。口縁内側端部の沈線は、退化しつつもあるものとなないものが存在するようである。ケズリについては、2・5などから約6~7割程度まで施されているということがわかる。杯蓋の平均は103mmである。

杯H身(6~11)は、全て蓋受けと立ち上がりがあるものである。蓋受けと立ち上がりの間、および口縁内側端部の沈線はみられなかった。立ち上がりは内傾し、長さも短くなっている。H-44号窯、H-15号窯でみられた、蓋受け下部のゆるい段はみられなくなっている。ケズリは7・8から蓋と同様、底部の約6~7割程度まで施されているということがわかる。杯身の最大径の平均は112.7mmである。

高杯(12~17・19)は全て無蓋高杯である。短脚無スカシが主で、12・19のようにスカシを有するものも出土しているが少数である。また、14のようにスカシ穴が切れ目化しているものもある。スカシ有り無しともに今までのものと比較して脚がかなり短くなっていることがわかる。杯部は12のように深く丸いものであり、口径も小さくなっている。全体的に今までの窯跡から出土したものと比べて小型化・簡略化されているといえよう。

ごく少量であるが、杯Bと思われる高台を伴う身と、「かえり」がなくつまみを伴う蓋のセットが出土している(20~23)。杯Bは杯Gよりも新しい器形である。杯Bと杯Gが同時に出土する例が多い(H-16号窯・I-101号窯など)が、H-50号窯からは杯Gの出土は確認されていない。杯Hよりも径が大きい。つまみは20のように扁平で大きめのものである。

3) H-118号窯の操業年代

本項では、前項で分析を行った3窯とH-118号窯を、(a)形態 (b)口径 (c)器種構成の3点において比較を行うことで先後関係を考察し、斎藤編年・城ヶ谷編年・尾野編年それぞれにおいてどこに位置付けられるかを明らかにする。

(a) 形態

まず杯H蓋に関してみていく。どの窯から出土したのも体部が垂直に下るもの・やや外に開くもの・丸みがあるものという3種が出土しているという点、頂部のケズリが約6~7割程度まで施されているという点、また東山50号窯に関しては不明だが口縁内側端部に沈線または凹線を有するものが出土しているという点で共通している。しかし稜についてみると、H-44号窯・H-118号窯・H-15号窯出土のものは明確な稜を有するものであるが、H-50号窯出土のものはやや不明瞭化しているという点で異なっている。

次に、杯H身に関してみていく。杯身は、どの窯から出土しているものも立ち上がりやや内傾しているという点、こちらもH-50号窯に関しては不明だが蓋受けと立ち上がり間に沈線、口縁内側端部に沈線または凹線を有するという点、ケズリが底部の約6~7割程度まで施されているという点では共通している。しかし、H-44号窯・H-118号窯・H-15号窯と比べ、H-50号窯の立ち上がりは明らかに短くなっているという点、またH-50号窯においては蓋受け下部のゆるい段がみられなくなっているという点で異なっている。

第2表 6-7世紀猿投窯編年表（斎藤1995、城ヶ谷2008、尾野1997を参考に作成）

暦年代	斎藤編年	城ヶ谷編年	尾野編年	猿投窯遺跡
530～560年頃	第Ⅱ期第1小期	Ⅱ期第2小期	Ⅲ期古段階	東山61号窯
	第Ⅱ期第2小期	Ⅱ期第3小期		蝮ヶ池
590～600年頃	第Ⅱ期第3小期	Ⅱ期第4小期	Ⅲ期中段階	東山6号窯
620～630年頃				Ⅲ期新段階
650～660年頃	第Ⅲ期第1小期	Ⅲ期第1小期	Ⅳ期古段階	
				岩崎101号窯
				東山16号窯 東山50号窯

同様に、高杯についても比較を行う。高杯はどの窯から出土したのも無蓋高杯であるという点では共通している。杯部においては、H-50号窯出土のものはやや小型化しているものの、どの窯から出土したのも基本的には体が深いもので径が大きめという点で共通している。しかし、脚部についてみていくと、窯によって明らかに様相が異なっている。H-44号窯・H-118号窯からは短脚無スカシのものも出土しているが少量であり、長脚2段スカシを有する高杯が多数を占めている。一方で、H-15号窯においては長脚2段スカシと短脚無スカシの出土量が伯仲しており、またH-50号窯では2段スカシが少数となり、短脚無スカシのものが多数を占めスカシを有するものも明らかに脚が短くなっている。

先行研究において、時代が新しくなるほど形態的に退化していき作りが粗雑化するということが指摘されており、編年上では共通の見解となっている（楡崎1961、斎藤1988など）。本稿でもこの見解に基づき、蓋杯に関してはH-44号窯・H-118号窯・H-15号窯→H-50号窯という先後関係であると考えられる。

(b) 蓋杯の口径

次に蓋杯（杯H）の口径について比較を行う。ここでは、H-118号窯出土のものは口径が10分の1以上残存して重みがないもの、H-44号窯・H-15号窯・H-50号窯に関しては口径が6分の1以上残存しており重みがないものを選択し比較を行う。

杯蓋については、H-44号窯の平均は119mm、H-118号窯の平均は114.7mm、H-15号窯の平均は110mm、H-50号窯の平均は103mmとなっており、口径が大きい順に並べると、H-44号窯→H-118号→H-15号窯→H-50号窯という順になる。

杯身についても、H-44号窯の最大径の平均は125mm、H-118号窯の平均は117.5mm、

H-15号窯の平均は117.4mm、H-50号窯の平均は112.7mmという結果となり、口径が大きい順に並べると、杯蓋と同様、H-44号窯→H-118号窯・H-15号窯→H-50号窯という順になった。蓋杯の口径は出現から次第に大きくなりH-61号窯期ごろにおいて最大となったのち、次第に縮小していくということが先行研究において明らかにされている（尾野1993）。よってこの順がおおよそ年代順となっていると考えられる。

法量分布からも比較を行いたい。杯蓋の口径に関しては第19図の法量分布図からみていく。グラフの山の頂点がH-44号窯とH-118号窯では116～120mm、H-15号窯では106～110mm、H-50号窯では100～105mmというように、口径が徐々に縮小化している傾向を読み取ることができる。その一方で、H-118号窯では先述したとおり、杯蓋口径では101～110mm、116～120mmにやや高い山がみられ、さらに126～130mmを含め、計3つの緩やかな山が確認できる。杯身についても同様である。H-118号窯の中型品の山はH-44号窯の山とH-15号窯の山を広く含みこんでおり、H-44号窯とH-15号窯の中間的様相を呈しつつ、さらに少数ながらもH-50号窯の平均値にも近い小型品を含み込んでいることがわかる。

さらにこの点について、遺物の出土状況から追究してみたい。8トレンチでは灰層を人工層位で上層から5回に掘り分けており、第1表では遺物ごとの出土層位も記している。一見して上層（1回目）から下層（5回目）まで、小型品から大型品までほぼすべての個体が確認できることから、H-118号窯においては杯の法量差は年代の差ではなく、作り分けがおこなわれていた可能性が指摘できる。また形態や生産内容の変化が見られないことから、操業年数に関してもさほど長くなかったと考えられる。尾野善裕氏は「焼成を1年1回とすれば操業期間は5～10数年、2回以上行っていたら長く見積もっても10年に満たない」（尾野1997b）ということ を述べており、H-118号窯の操業期間は短期間、数年程度とみるのが妥当であろう。

(c) 器種構成

最後に出土遺物の器種構成を比較する。第3表はH-44号窯、H-118号窯、H-15号窯、H-50号窯の器種構成をまとめたものである。

4つの窯の全てから、杯H・無蓋高杯・瓶壺類・甕・甗・甗が出土しているという点では共通している。しかし、H-15号窯のみ杯Gが出土しており、またH-50号窯のみ杯Bが出土しているという点で異なる。この時期の杯の変化の方向性について、杯Hと杯Bは一定期間共存し、杯H

第3表 H-44・118・15・50号窯器種構成表

遺物	遺跡	H-44	H-118	H-15	H-50
杯H蓋		○	○	○	○
杯H身		○	○	○	○
有蓋高杯					
無蓋高杯		○	○	○	○
瓶壺類		○	○	○	○
甕		○	○	○	○
甗		○	○	○	○
杯G蓋				○	
杯G身				○	
杯B蓋					○
杯B身					○

は7世紀後半代まで杯類の主力製品、杯Gは杯類の主力生産品となっておらず大きな流れとしては杯H主流の時代から杯B主流の時代に移行している、ということが指摘されている(尾野1997b)。これを参考にする、H-44号窯・H-118号窯→H-15号窯→H-50号窯という先後関係が考えられる。

以上(a)(b)(c)の3点から、ここで扱った4窯の先後関係についてまとめる。まず稜や蓋受け下部の段に退化傾向がみられ、高杯の様相や杯Bの出土など明らかに異なる点を持ち、上記の(a)(b)(c)のいずれにおいても最後に位置付けられると考えられるH-50号窯は、4窯のなかでもっとも後に位置付けて問題ない。

H-44号窯とH-118号窯の先後関係であるが、出土遺物の器種構成や高杯のスカシのありなし、また蓋杯の身の立ち上がりの長さや傾き具合、蓋の稜の明瞭さなど、両窯は非常に酷似している。しかし口径についてみると、H-44号窯は杯蓋119mm・杯身125mm、H-118号窯は杯蓋114.7mm・杯身117.5mmと明らかに縮小している。法量分布についてもH-44号窯にはみられなかった小型品が、H-118号窯では一定量出土していることがわかり、H-118号窯はH-41号窯より時間的に後出の窯であると考えられる。

H-15号窯とH-118号窯との先後関係であるが、口径においては、H-118号窯では大型品が一定量みられるものの、法量平均値はH-15号窯が杯蓋110mm・杯身117.4mm、H-118号窯が杯蓋114.7mm・杯身117.5mmと、とくに杯身に関してはあまり差が出なかった。しかし法量分布の裾野はH-118号窯のほうが広く大型品まで含みこむこと、器種構成についてH-15号窯からは新器種である杯Gが出土していることや、H-118号窯では長脚2段スカシが中心に出土しているが、H-15号窯では長脚2段スカシと短脚無スカシが同等量出土していることから、H-118号窯がH-15号窯に先行すると考えられる。

以上のことから、H-118号窯の編年の位置付けとしては、H-44号窯に後出し、H-15号窯に先行する時期と本稿では考える。

この結論をもとに斎藤氏・城ヶ谷氏・尾野氏それぞれの編年案のなかでH-118号窯がどこに位置付けられるかを考えたい。

まず斎藤編年では、第Ⅱ期と第Ⅲ期を「つまみと内面に口縁部より突出するかえりを有する蓋と無台杯身の組合せが出現」するかどうかで分類しており、杯Gが出土していないH-118号窯は、H-44号窯と同じ時期である第Ⅱ期第3小期に位置付けられる。城ヶ谷編年でも斎藤編年と同様に、Ⅱ期とⅢ期を杯Gの出現をもって区分しており、H-44号窯と同じ時期であるⅡ期第4小期に相当する。

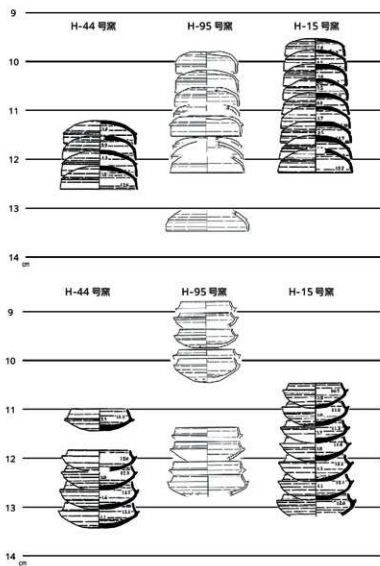
尾野編年では法量に関する指摘がなされており、H-44号窯が属するⅢ期中段階は120mm前後が中心、H-15号窯が属するⅢ期新段階は110mm前後が中心とされており、この両者が混在するH-118号窯は、中間の様相を呈すると言える。尾野氏が示す他の指標からは、Ⅲ期中段階は口縁内側端部に凹線ないし沈線が認められる、2段3方スカシの高杯が主流とされ、その一方、Ⅲ期新段階は口縁内側端部の凹線ないし沈線は不明瞭化、高杯は2段スカシと短脚無スカシがそれぞれ一定量出土するとされている。これらの点ではH-118号窯はⅢ期中段階に近い。

3氏それぞれの見解に照合すると、H-118号窯は標式窯としてはH-44号窯に近く、その最終段階の窯として位置づけることができる。斎藤編年では第Ⅱ期第3小期は600年少し前～650年を少し超えるあたりまでが該当しており、城ヶ谷編年の編年図からは、Ⅱ期第4小期は6世紀末～7世紀の第1四半期にあたるのが読み取れる。尾野氏はⅢ期中段階を600年頃～630年頃と想定している。これらのことから、H-118号窯の操業年代は、620～630年前後と考えることができる。

ただし、先程来たびたび述べてきたとおり、複数量量の杯類の作り分けがおこなわれているとしたら、法量や器種構成による窯の編年自体を再考する必要もあろう。今後の課題としたい。

(田中・梶原)

※本節は、2014年1月に田中が執筆し名古屋大学文学部に提出した卒業論文を、梶原が加筆修正したものである。近年、本窯に近い年代の窯として、H-95号窯が名古屋市教育委員会によって調査されているが(岡ほか2018)、本節ではその成果を反映させることができなかった。今後の課題としたい。



第23図 H-44・95・15号窯杯蓋・杯身口径分布図(岡ほか2018)

■引用・参考文献一覧

- 愛知県史編さん委員会、2015、「編年表」『愛知県史 別編 窯業Ⅰ 古代 猿投系』、愛知県史編さん委員会：名古屋。
- 岩崎直也、1987、「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第4号、信濃史学会：松本。
- 大西 遼、2018、「愛知県下の窯業遺跡出土資料の基礎的調査報告Ⅰ－猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』23、愛知県陶磁美術館：瀬戸。
- 岡千明ほか、2018、「埋蔵文化財調査報告書82 H-95号窯」、名古屋市教育委員会：名古屋。
- 荻野繁春、1981、「第Ⅵ章 7・8世紀代の須恵器編年 一美濃国・尾張国一」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』、岐阜市教育委員会：岐阜。
- 尾野善裕、1993、「猿投窯6世紀の空白をめぐる」『考古学フォーラム』3、愛知考古学談話会：名古屋。
- 尾野善裕、1997a、「尾張・西三河（窯跡）猿投・尾北・その他」『古代の土器5－1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』、古代の土器研究会：奈良。
- 尾野善裕、1997b、「東海」『古代の土器研究会第5回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器』、古代の土器研究会：奈良。
- 尾野善裕、1999、「猿投窯から見た東海の7世紀の土器（須恵器）」『古代土器研究』1、古代の土器研究会：奈良。
- 尾野善裕、2000、「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』、東海土器研究会：豊橋。
- 尾野善裕編、2006、「東山114号窯発掘調査報告書」、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室：名古屋。
- 尾野善裕・梶原義実編、2010、「東山61号窯発掘調査報告書」、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室：名古屋。
- 梶原義実・片桐紀奈子編、2017、「東山72号窯発掘調査報告書」、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室：名古屋。
- 細編 茂、2007、「H-115号窯発掘調査報告書 学校法人愛知淑徳学園学校整備工事に伴う発掘調査」、名古屋市教育委員会：名古屋。
- 小島一夫、1979、「光真寺古窯跡発掘調査報告書」、名古屋市教育委員会：名古屋。
- 斎藤孝正、1983、「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集 史学29』、名古屋大学文学部：名古屋。
- 斎藤孝正、1986、「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』2、名古屋大学総合研究資料館：名古屋。
- 斎藤孝正、1988、「猿投窯Ⅲ期坏類の型式編年」『名古屋大学総合研究資料館報告』4、名古屋大学総合研究資料館：名古屋。
- 斎藤孝正、1989、「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』、愛知考古学談話会：名古屋。
- 斎藤孝正、1995、「Ⅰ 東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録第三巻 東日本編Ⅰ』、雄山閣：東京。
- 城ヶ谷和広、1998、「猿投窯における須恵器生産の展開 一分布の問題を中心に一」『榑崎一先生古希

- 記念論文集」、真陽社：京都。
- 城ヶ谷和広、2007、「愛知県下における須恵器生産と流通」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』8、愛知県埋蔵文化財センター：弥富。
- 城ヶ谷和広、2008、「猿投窯・尾北窯における窯業生産体制」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会：名古屋。
- 瀬川貴文、2008、「東山 44 (H-44) 号窯跡」「東山 15 (H-15) 号窯跡」「東山 50 (H-50) 号窯跡」『新修 名古屋市史 資料編 考古 1』、名古屋市：名古屋。
- 高島忠平、1971、「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌』57 巻第 1 号、日本考古学会：東京。
- 楢崎彰一、1956、「愛知県猿投山西南麓古窯址群」、愛知県教育委員会：名古屋。
- 楢崎彰一、1958、「猿投山須恵器の編年」『世界陶磁全集 1』、河出書房：東京。
- 楢崎彰一、1959、「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』、名古屋大学文学部：名古屋。
- 楢崎彰一、1959、「愛知県猿投山西南麓古窯址群」、愛知県教育委員会：名古屋。
- 楢崎彰一、1961、「土器の発達—須恵器と土師器—」『世界考古学大系』4、平凡社：東京。
- 楢崎彰一、1966、「陶器全集第 31 巻 猿投窯」、平凡社：東京。
- 楢崎彰一、1983、「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ、愛知県教育委員会：名古屋。
- 楢崎彰一・斎藤孝正、1983、「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』2、愛知県陶磁資料館：瀬戸。

報告書抄録

ふりがな	ひがしやま 118 ごうようはくつちょうさほうこくしよ							
書名	東山 118 号窯発掘調査報告書							
副書名								
巻名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梶原義実・田中哲史・大塚友恵・小林新平・井上華多・大西美那・波多野晶 真野智弘・福島 鷹・村松裕南							
発行機関	名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室							
所在地	4648601 愛知県名古屋市千種区不老町							
発行年月日	2020年9月30日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東山118号窯	愛知県名古屋市 千種区園山町 三丁目	23010	5-139	35度 9分 22秒	136度 58分 7秒	2010年 9月16日 ～ 2013年 9月30日	30㎡	学術調査
	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	窯業遺跡	飛鳥時代		灰原		須恵器		

写 真 图 版



1. 調査地全景



2. 5トレンチ灰層上面（西より）



3. 5トレンチ完掘状況（東より）



4. 6トレンチ灰層上面（西より）



5. 6トレンチ灰層堆積状況（西より）



6. 6トレンチ測量風景



7. 7トレンチ掘削中



8. 7トレンチ灰層上面（東より）



9. 7トレンチ完掘状況（西より）



10. 8 トレンチ灰層上面 (東より)



11. 8 トレンチ北壁



12. 2010年度 集合写真



15. 2013年度 集合写真



13. 2011年度 集合写真



14. 2012年度 集合写真





東山118号窯発掘調査報告書

発行日 2020年9月30日

発行 名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室
〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

印刷 株式会社コームラ
〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ふりんどびあ3
<https://www.kohmura.co.jp>

